

# 閑谷学校における「学びの場」の建築的構造化について

On the Architectural Structuration of the Place for Study in the Shizutani School

河田智成

Tomonari Kawata

## 序 本稿の対象と目的

閑谷学校は、備前岡山藩が庶民子弟教育機関として設けた藩営の郷校である。この種の教育施設としては、江戸時代初期という非常に早い時期に設立されたものであるが<sup>1</sup>、主要な建築施設と周辺環境とが全体として往時のまま保存されており、現在もその「学びの場」を迫体験できる(図1)。本稿では、閑谷学校とそれを取り巻く環境の全体を、建築的に構造化された「学びの場」として捉え、その形式的特性を明らかにしたい。

閑谷学校を含む藩営の教育施設の研究としては、まず、石川謙や笹井助治による教育学・歴史学からの先駆的研究がある<sup>2</sup>。これらの研究は、全国調査、および、『日本教育史資料』や各県史・藩史などに基づいた総合的・悉皆的なものである。その後、個別施設について研究が進められ、閑谷学校に関しても、岡山藩政史研究の一貫として取り組まれた谷口澄夫の研究などがある<sup>3</sup>。こうした閑谷学校研究の成果は、『増訂 閑谷学校史』に概観することができる<sup>4</sup>。藩営の教育施設を直接的に取り上げる研究は、社会史の影響によって研究視点が多角化するのにもなっており、近年は減少しているものの<sup>5</sup>、閑谷学校を扱う研究に関しては、1997年より『閑谷学校研究』が刊行されるなど<sup>6</sup>、継続して進められている。

藩営教育施設の建築学的研究は、前述の石川や笹井による先駆的研究を参照しつつ、城戸久、続いて、高橋宏之によって行われ、その成果が共著として『藩校遺構』にまとめられている<sup>7</sup>。閑谷学校は、ここで、その保存修理工事報告書も参照されて<sup>8</sup>、

比較的大きく取り上げられている。管見によれば、その後、この種の建築を対象として、新しい知見を示すような、まとまった建築学的研究はなされていない<sup>9</sup>。ただし、閑谷学校の建築に関しては、『閑谷学校研究』において、各建築要素から建築構成要素の細部までが随時個別に取り上げられ、その成り立ちなどが報告されている<sup>10</sup>。

こうした既往研究では、閑谷学校の個々の建築要素・建築構成要素の構造的・計画的・意匠的特徴が論じられてきた。また、諸施設の配置の事実関係が明らかにされるとともに、主要施設個々の配置状態、つまり、聖廟や講堂の個々の独立性の程度に関心が向けられてきた。本稿では、配置の問題に一步踏み込んで、建築要素・建築構成要素のあいだの配置関係のなかに、中心・囲い・焦点・領域・軸といった場所を構造化する諸要素を読み取り、全体・部分、内部・外部、開放・閉鎖、高位・低位といった秩序をとまなう場所の構造を分析する<sup>11</sup>。そうすることで、閑谷学校の「学びの場」の形式的特性を、全体として明らかにしてみたい。

以下、まず考察対象である閑谷学校の概要を、各建築施設の成立とそこでの教育を中心にまとめる。その後、閑谷学校の「学びの場」を領域に着目して分析し、分節された領域間の関係を示す。さらに、聖廟と講堂を含む「学びの場」の主要領域について、場所を構造化する諸要素、および、それらの要素間の関係を読み取ることで、場所の構造化のあり方を明らかにする。最後に、この結果を、主に聖廟・講堂の配置関係の観点から、代表的あるいは類縁性のある近世教育施設と比較することで、閑谷学校の「学びの場」の形式的特性を示す。

## 第1章 閑谷学校の概要<sup>12</sup>

### 1-1. 閑谷学校の成立(図2,3)

好学の大名として知られる初代岡山藩主池田光政は、儒教による仁政を理想とし、藩主導の教育政策を積極的に展開した。光政は、先ず、寛文6(1666)年に、岡山城内に石山仮学館を設けて、藩士子弟教育に着手する。同じ寛文6(1666)年には、教育政策と連動して寺院淘汰を断行、この影響で潰れた寺子屋に代わって庶民子弟教育を担う施設として、寛文7(1667)年に、岡山城下に町方手習所を、翌寛文8(1668)年には、領内全域に郡中手習所を設けている。続いて、寛文9(1669)年に、石山仮学館に代わる岡山藩学校を岡山城下に開学、翌寛文10(1670)年には、学校奉行津田永忠に閑谷学校建設を命じ、藩士・庶民子弟



図1 現在の閑谷学校



図2 文化10(1813)年武元君立作成の「閑谷学図」(部分)

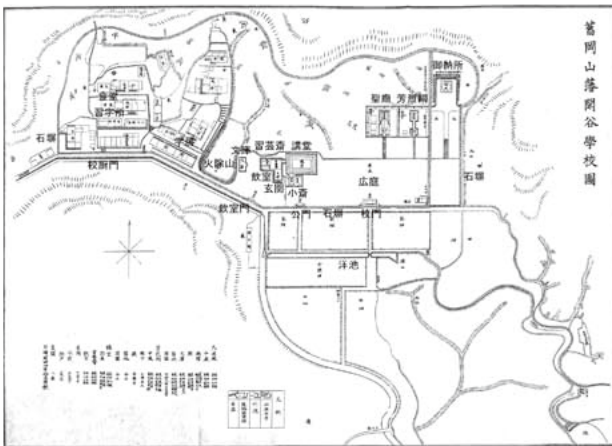


図3 閑谷学校配置図(校門の位置は不正確)

弟教育の本格的整備に取り組んで行った。閑谷学校は、この寛文10(1670)年から延宝2(1674)年までを第1期、そして、天和2(1682)年から元禄15(1702)年までを第2期として、建設された。

第1期工事では、寛文10(1670)年に仮学校が設けられた後、寛文12(1672)年に食堂と学房とが置かれたのに続いて、延宝元(1673)年に茅葺の講堂が、延宝2(1674)年に茅葺の聖廟がそれぞれ成った。この延宝2(1674)年4月1日に、学則である「閑谷学校壁書」が定められ講堂に掲げられるとともに、9月には、既に息子綱政に家督を譲って致仕していた光政が閑谷を訪れて聖位を拝している。閑谷学校は、聖廟と講堂とを備え、この時期に一応の整備を終えたものと考えることができる。また、同じ延宝2(1674)年4月1日付けで、藩校領2000石から分離された木谷村279石が閑谷学田として下付され、財政的基盤も一応確立されている。そして、翌延宝3(1675)年に、一時は領内123ヶ所に及んだ郡中手習所が、藩財政窮乏のため、第1期工事を完了した閑谷学校へと廃止・統合され、それまで木谷村に開設され

た一手習所でもあった閑谷学校が、藩営の郷校として庶民子弟教育の拠点となったのである。

第1期工事後、延宝5(1677)年に講堂が黒瓦葺に改築されるとともに、廃止された手習所の書籍を収蔵するための文庫などが設けられている。しかし、本格的な再整備となる第2期工事は、閑谷学校を永続させるように遺言して光政が亡くなった天和2(1682)年に始まり、光政死去の直前に郡代の地位に着いていた永忠によって進められた。

第2期工事では、まず、貞享元(1684)年に新聖廟が、貞享3(1686)年に光政を祀る芳烈祠が完成した。そして、元禄10(1697)年に校城南境に石門が建立されたのに続いて、元禄11(1698)年に新講堂が建設に着手、元禄14(1701)年に落成している。あわせて、講堂付属施設として、釣屋を介して新講堂に繋がる習芸斎、飲室、玄関が設けられ、藩主御成間である小斎が新講堂に直接接続された<sup>13</sup>。同じ元禄14(1701)年には、学校周囲を巡って、東から鶴鳴門と称する校門、御成門である公門、飲室門、校厨門を備えた石堀が完成する<sup>14</sup>。また、新講堂建設中の元禄13(1700)年に、学田の制が改められ、閑谷学田を岡山藩の版図から切り離して、永代閑谷学校に付与する措置が取られ、財政的基盤も磐石となっている。そして、元禄15(1702)年、光政の遺髪などを納める椿山あるいは椿谷と称する御納所が築かれ、第2期工事は完了する。その後、文化10(1813)年に黄葉亭、明治36(1903)年に華甲斎といった付属の茶室・書斎が、校地を限る石堀の外に設けられたものの、現在見る備前焼本瓦葺の閑谷学校は、この第2期工事完了時の姿のものである。

## 1-2. 閑谷学校の教育

光政は、当初、熊沢蕃山を召して陽明学を奨励するが、後に、蕃山を遠ざけるようになり朱子学に転じた。閑谷学校の学統も「学流ハ国学之通、純粹朱説相守り申候」とあるように<sup>15</sup>、藩学校と同様、正統派の朱子学である。

閑谷学校で施された教育の具体的方法と内容に関しては、閑谷学校での教育活動が最も盛んであった文化・文政期に、教授武元君立が残した記録などから窺い得る<sup>16</sup>。それによると、諸生は、おそらく藩学校での区別に従って、8歳以上で前髪のある小生と前髪を取った19歳までの大生とに区分されており、全員で約60人、内10人程が大生であった。この諸生全員に、まず習字と素読とが課せられた。小生は習字・素読を、大生は素読を行うが、これは、休日である5の日と10の日を除いて、毎日10時から13時まで、習字所において、習字師と読書師によって指導された。素読の教材は、『孝経』『小学』と四書・五経から、『左伝』『国語』『史記』『漢書』といった中国の史書へと及んだ。また、3の日と8の日には、習字所での習字・素読の後、14時から習芸斎にお



いて、読書師の輪番で、五経および諸賢伝の類の講釈が行われた。この講釈の後、小生には一人ずつの試読、大生にはグループでの講習が課せられている。習芸斎では他に、朱子とその白鹿洞書院に掲げていた学規「白鹿洞揭示」の講釈が、毎月始めの朝、読書師・大生の輪番で行われていた。これには、近村百姓の出席も許されていたようである。これらに加えて、1の日と6の日の10時からは、講堂において、教授役による四書の講釈があった。つまり、1の日と6の日には、講堂での講釈の後に、習字所で習字・素読が課せられたわけである。講堂での、この「月次之講釈」には、諸生はもとより、教職員全員が出席し、奉公人も出席できた。藩からの検分も度々行われ、閑谷学校における最重要の課業であったことが窺われる。これが習字所・習芸斎・講堂という学習施設において行われた正課としての教育である。

他に、休日である5の日と10の日以外には、16時から18時までの休憩時間を除いて、7時から22時まで寸暇なく勉強するように定められており、学習施設以外の教授・読書師宅といった生活施設でも、寄宿生を対象にした課外での会読・試読が実施されていた。また、諸生の生活施設である学房には、大生1人を頭として小生・大生を混ぜて4・5人ずつで寄宿していたが、そこで大生が小生に素読を授けることもあった。

以上から、閑谷学校では、漢学のみの1学科無等級制を採りながらも、小生・大生の区別を設け、能力に応じた少人数教育によって高等教育に対応していたことが分かる。

閑谷学校には、教育内容と深く関係する行事として、「読初（よみはつ）の儀」と「積業（せきごふ）の儀」とがある。「読初（よみはつ）の儀」は、年頭正月の講堂での教授役の講釈に、藩学校から学校奉行一行が閑谷に出校列座して行われたものである。当初は『大学』首章の句である三綱領が講じられていたが、寛保4（1744）年から『孝経』の巻頭が講じられている。「積業（せきごふ）の儀」は、本来、春2月、秋8月の最初の丁（ひのと）の日に執り行われる、孔子を祭る儒教儀礼である。岡山藩では、閑谷学校に新聖廟が完成し、翌貞享3（1686）年に、光政を祀る芳烈祠が成ったのを機に、この年から、春2月は藩学校で、秋8月は閑谷学校で、「積業（せきごふ）の儀」を行っている。藩学校から学校奉行が出向して執り行う、閑谷学校での「積業（せきごふ）の儀」は、聖廟での儀礼の後、芳烈祠で「芳烈祠の儀」を行い、さらに、講堂に移って教授役が講釈する「講経（こうけい）の儀」があり、最後に、奉行以下役人・上士は講堂で、下士・諸生は習芸斎で、「神酒頂戴（かみさけ）の儀」にあずかるというものであった<sup>17</sup>。この「積業（せきごふ）の儀」でも、当初は『大学』『中庸』『論語』の首章の句が毎年代わる代わる講じられている。

「読初（よみはつ）の儀」や「積業（せきごふ）の儀」といった閑谷学校における重要行

事においては、学習施設である講堂や習芸斎が、聖廟や芳烈祠とともに儀礼施設として機能しており、特に、各儀礼における講堂の役割には欠かせないものがあったことが分かる。

## 第2章 閑谷学校の「学びの場」の諸領域

### 2-1. 領域の分節（図4）

光政が、寛文6（1666）年10月に先祖の墓所候補地であった閑谷を検分した際に、この地を「山水清閑、読書講学に宜しき地」と称えたことが、学校建設の機縁となっていることから窺えるように、閑谷学校は、四方を山々に囲まれ、南方に開いた僅かな谷間から閑谷川が抜ける、小盆地に建っている。山を越えた北には古代からの山陽道が、谷間を抜けた南には近世山陽道である西国街道が、それぞれ東西に通じているが、まさに閑静な山谷である。閑谷学校は、先ず、こうした自然地形によって校域を限定される。閑谷川が流れる谷間の校域南境に設けられた石門は、ここから北の田畑が学田・学林である位置に建つものであるが、山々によって盆地状に分節された校域全体を示す最小限の建築要素と見ることもできる。

小盆地には、これを南北に限るように、巾約7m、長さ約100mの一文字型の泮池が、東西に走る<sup>18</sup>。閑谷学校の建築要素のひとつが、この泮池の北側に配されている。

泮池の北側約50mに、茶畑となっている前庭を挟んで、泮池に並行して石塀が築かれ、これが校地を囲うように限定している。その延長は765mで、校地東の石塀外に位置する御納所を囲う石塀も含めると、総延長846mにも及ぶものである。校地の東西と南の石塀は、巾約1.8m、高さ約2mの蒲鉾型断面の精巧なものであり、北の山腹部分のものは、自然地形を利用した巾1m程の石垣積みとなっている。

石塀に囲まれた校地を東西に分節しているのが火除山である。これは、古図に「火避ヶ築山」とあるように、高く築いた石垣上に土盛したものである。火除山西側の領域は、学房学舎の領域であり、学習施設である習字所を中心に、生活施設である学房、食堂、吏舎・客舎などが配され、石塀に校厨門が設けられている。東側の領域には、非日常の儀礼施設、儀礼施設としても兼用される学習施設が配されているが、この領域はさらに、石塀に開けられた門などによって、次のような5つの領域に細分節される。

石塀には、東から校門、公門、飲室門、校厨門が開けられている。まず、校門から広庭を抜けて19段の石階を登り、聖廟の正門である外門、さらに聖廟を囲む練塀内部の中庭から東階・西階を経て大成殿に至る軸を中心として、その周囲に聖廟の領域が形成されている。この聖廟の領域の西側には、先ず、公門と講堂平

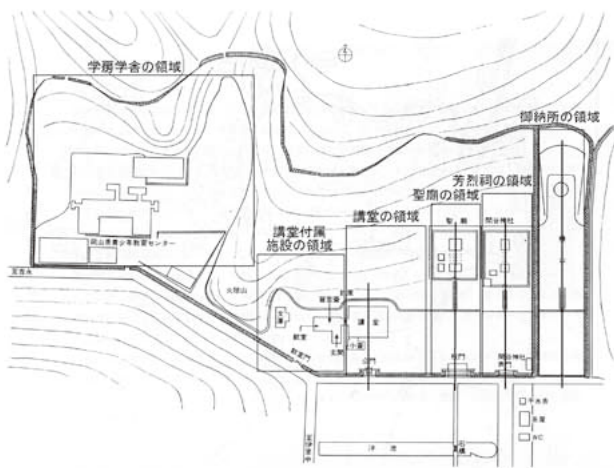


図4 閑谷学校における領域の分節

側中央とを結ぶ軸によって、その周囲に小斎を含む講堂の領域が形成される。さらに西側には、飲室門から入る、習芸斎・玄関・飲室、そして、文庫が置かれた講堂附属施設の領域がある。飲室門と建築施設が軸を形成することはないが、この領域は、小斎と玄関のあいだの位置から南に延びる仕切堀と石堀、火除山によって囲われることで<sup>19</sup>、分節されている。聖廟の領域の東側には、先ず、芳烈祠に登る石階から、芳烈祠の正門である中門、さらに芳烈祠を囲む練堀内部の中庭から階を経て本殿に至る軸と、それを逆に広庭まで延長した軸を中心として、その周囲に芳烈祠の領域が形成される。さらに、東側には、石堀で一旦隔てられた御納所の領域がある。この領域は、南の練堀に開けられた出入口から、直径約6m、高さ約2.5mの土盛の塚へと至る中心軸を有し、東西北の石堀と南の練堀によって囲われることで、分節されている。

山々に囲まれて校域が限定され、沱池と石堀によって校地が限定され、さらに、石堀内の校地が、東から御納所の領域、芳烈祠の領域、聖廟の領域、講堂の領域、講堂附属施設の領域、火除山を挟んで、学房学舎の領域という、6つの領域に細分節されていることが、確認できた。

## 2-2. 領域間の関係

次に、石堀内の6つの領域のあいだにある関係を分析する。

火除山東側の諸領域は、非日常の儀礼に関わる場、西側の領域は、儀礼に関わらない日常に特化した場となっている。儀礼に関わる場の儀礼施設・学習施設が備前焼本瓦葺の壮麗な建築となっているのに対して、日常に特化した場の学習施設・生活施設の殆んどが、茅葺の粗末な建物となっていることから、非日常の儀礼に関わる場と日常に特化した場とが、外観においても差異を与えられて、それぞれに明瞭なまとまりを有していることが分かる。また、石堀内の6領域は、講堂の領域、講堂附属施設の領

域、学房学舎の領域という、日常の学習施設・生活施設からなる生者の場と、聖廟の領域、芳烈祠の領域、御納所の領域という、非日常に特化した儀礼施設からなる死者を祀る場とに、二分することも可能である。

こうして見ると、講堂の領域と講堂附属施設の領域とが、非日常には儀礼の場でありながら、日常には生者の学習の場でもあるという、両義的な領域として、非日常に特化した儀礼施設からなる聖廟の領域、芳烈祠の領域、御納所の領域と、日常に特化した学習施設・生活施設からなる学房学舎の領域とを媒介していることが分かる。

次に、日常の生者の場における学習施設に注目してみる。諸生は、習字所では、習字師・読書師の指導の下で毎日の習字・素読に励み、講堂では、月に6回、朝から心身を整え端座して、教授役の講釈を傾聴した。それに対して、習芸斎では、月に6回、日常指導を受ける読書師から講釈を授かり、その後、個別に日常の学習をいわばテストされた。こうした習芸斎での学習は、ちょうど、毎日の習字所での学習と月6回の講堂での学習の中間的性格を有するものであった。つまり、学習施設に注目すると、習字所から習芸斎、そして、講堂へと、日常的な学習から非日常的な学習への移行が認められ、講堂が、日常の生者の学習施設でありながら、その範囲ではっきりと非日常的性格も併せ持っていたことが分かるのである。

以上から、学房学舎の領域から、講堂附属施設の領域を経て、講堂の領域、そして聖廟の領域へと、非日常的性格が強まり、儀礼の場としての純度が高まることによって、聖性の高まりが生じている、と言える。同じ関係が、死者を祀る場の諸領域のあいだにも存在する。つまり、光政の肉体の一部を葬る御納所の領域から、光政を祀る芳烈祠の領域、そして、孔子という聖者を祀る聖廟の領域へと、精神性を高め、儒学の理想に近づくことによって、聖性に高まりが生じているのである。死者を祀る場における、こうした聖性の高まりは、御納所・芳烈祠・聖廟の位置関係にも表現されている。御納所は、椿谷とも呼ばれるように、谷間の塚として形成されている。それに対して、芳烈祠と聖廟とは、講堂の位置する広庭から石階を登った山裾の高い位置にあり、その上で、聖廟が芳烈祠よりも約1m高い位置に建てられているのである。

石堀内の校地東西に並列された諸領域は、聖廟の領域に聖性の高まりを置きながら、それに隣接する講堂の領域で、東側の非日常の儀礼に特化した諸領域と西側の日常の学習・生活に特化した領域とを媒介するというかたちで、関係付けられていた。山々、沱池、石堀による校域・校地の限定とあわせ、閑谷学校の「学びの場」は、全体として、山々、自然の高低差、尾根を利用した築山、川を利用した池<sup>20</sup>、石堀、施設配置、屋根の葺方などに



よって、つまり、自然的要素と人工的要素とを複合的に利用することによって、有機的に分節され、いわば平地的な顕教的構成でも、山地的な密教的構成でもない、独自の建築的構成を示している。また、儒学、特に朱子学を教育の根幹に据える藩営教育学校として、聖廟と講堂とを最重要施設とすることは一般的であるが<sup>21</sup>、閑谷学校では、これが、校地内の領域間の関係としても、極めて整合的に表現されているのである。

### 第3章「学びの場」における聖廟と講堂

#### 3-1. 講堂という中心

校地において東側の非日常の儀礼に特化した諸領域と西側の日常の学習・生活に特化した領域とを媒介する、講堂の領域について、講堂が「学びの場」をいかに構造化しているのかを分析する(図5.6)。

講堂には習芸斎・玄関・飲室、そして、小斎が付属している。習芸斎とは西で釣屋を介して、小斎とは南で渡りを介して繋がっているが、それらとは完全に独立しており、南北面にあたる平側、東西面にあたる妻側とも、戸袋や木階を除けば、対称の形態を保っている。

講堂本体は、桁行7間、梁間6間、単層、入母屋鉾葺で、その平面は内室・入側・廻縁に分節されている。内室・入側・廻縁とも板敷で、内室と入側の境には10本の丸柱が廻り、その柱間には白漆喰塗の小壁が施されているが、柱間の鴨居から下は開け放たれ、敷居も内室・入側の板敷と面が揃えられおり、内室と入側とは一体的な大広間となっている。天井の形式も棹縁天井で統一されているが、天井の高さは入側が一段低く設定されている。この大広間と廻縁の境の柱間は、東西南北4面とも、中央間を両開きの棧唐戸、その他を花頭窓とし、何れも内側に明障子を入れ、小壁は白漆喰塗としている。廻縁の床は大広間の床よりも一段低く、天井も化粧屋根裏として大広間とは区別されている。廻縁の外周の柱間には、すべて欄間を設け、外側に蓮子、内側に明障子を入れている。欄間の下はすべて開け放たれ、雨戸を立てるかたちとなっており、廻縁が半内部として扱われていることが分かる。この外側に、庇で覆われた基壇が巡っている。

講堂は、内部から外部に向かって、内室、入側、廻縁、庇・基壇に分節され、内室・入側の空間を開放的に一体化しながら、それを廻縁と庇・基壇とを介して外部に開放して行くかたちを採っている。これは、図式的に換言すれば、講堂最内部の内室が、内部の入側、半内部の廻縁、半外部の庇・基壇によって、柱間と柱間装置とを挟みながら、次々に取り囲まれているということである。そして、こうした講堂内室を中心とする、囲いによる場所の構造化は、

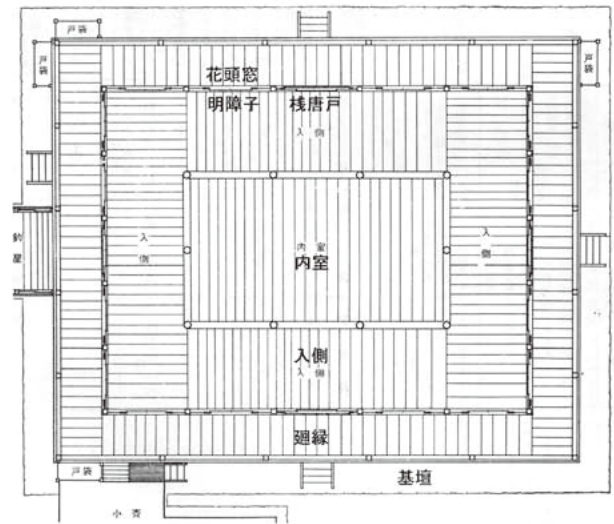


図5 講堂平面図



図6 講堂内部

講堂を越えて、山裾に形成された土手と石堀・火除山に囲まれた広庭、そして、石堀に囲まれた校地から、さらに、山々によって囲まれた盆地の校域へと、次々に続いている。

雨水の集まる広庭では、地下に北から南へと各所に溝を掘って割栗石を埋めた暗渠を設けて、排水施設としている。広庭は、この排水施設に約30cmの表土を盛っていることもあり、石堀外よりも、校門の位置で階段3段分程、地面が高くなっている。高さ約2mの石堀外から石堀内を窺うことは不可能であるものの、成長した諸生であれば、その逆は可能な状態である。また、広庭の地面には水勾配がとられており、北に行くほど地面の位置は高くなる。よって、広庭を北に進めば、石堀外の山々を広く見渡すことが可能となる。このように広庭が内部から外部へと開いていることは、

講堂の基壇、さらに廻縁に立てば、誰の目にも明らかである。

石塀という囲いによる広庭の分節は、内部から外部へ向けは開放的なものであり、講堂の開放性と響き合っている。結局、講堂内室から、校域を限定する山々による囲いに至るまで、遠心的に開放されたかたちとなっているのである。それに対して、外部から内部へ向けは、山々・石塀という高い囲いによって校域・校地が隠されるとともに、影の暗さによって講堂内部空間が隠されており、求心的に閉鎖されたかたちとなっている。

このように、講堂は、東側の非日常の儀礼に特化した諸領域と西側の日常の学習・生活に特化した領域とを媒介する領域にありながら、閑谷学校の「学びの場」を、内室から山々へと、内部へは閉ざし、外部へは開きながら、囲って分節して行く、中心として働いているのである。

### 3-2. 聖廟という焦点と軸

次に、校地における聖性の高まりを成す、聖廟の領域について、聖廟が「学びの場」をいかに構造化しているのかを分析する(図7)。

聖廟の領域には、既述のように、校門から聖廟の大成殿を焦点

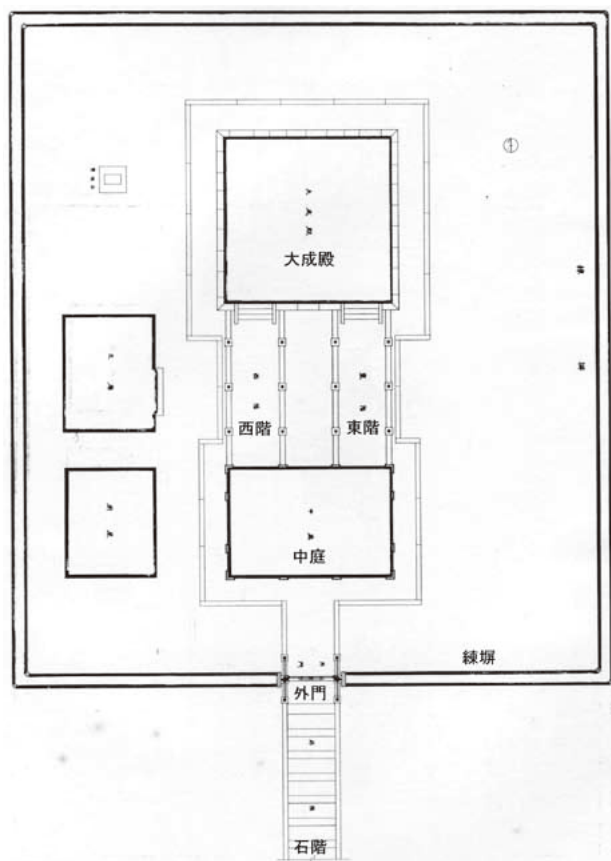


図7 聖廟配置図

とする軸が形成されている。大成殿は聖廟を囲む練塀の中央北寄りに位置する。桁行柱間とも3間の正方形平面、単層、入母屋で、内部中央北寄りに八角形朱塗りの聖龕を設けて孔子像を安置している<sup>22</sup>。天井は重厚な格天井である。東西両側面の中央柱間には花頭窓を配して、内側に明障子を入れている。南側正面の柱間は3間とも棧唐戸の出入口で、この東と西のものが、それぞれ東階と西階に接続する。東階・西階は、何れも両下造の屋根根が架かった吹き放ちの渡廊下で、大成殿と中庭を結んでいる。ここから大成殿へは、花崗岩で亀腹に築いた大成殿の基壇の高さ、石階3段分を登って入ることになる。中庭は桁行3間、柱間2間、単層、入母屋で、天井は棹縁天井である。南側正面の中央柱間を棧唐戸とし、両脇間に花頭窓を配して、内側に明障子を入れている。北側の東階・西階を介して大成殿に面する柱間3間は、すべて折り上げ板戸を吊った出入口となっており、開け放てるかたちとなっている。大成殿、東階・西階、中庭の床仕上げは、亀甲型の備前焼瓦敷で統一されている。大成殿、東階・西階、中庭は、延長92mの練塀による囲い、床仕上げの統一、南北軸上での直線的配置によって、聖廟としてまとまりながら、そこに天井形式の差異、高低差を設けることで、大成殿内部の聖龕の孔子像に向かっての聖性の高まりを示している。

練塀の南中央に設けられた聖廟の外門は、切妻の四脚門で、約3mを隔てて中庭南正面に面している。広庭を挟んで外門に対しては、校門は、切妻の四脚門を本体として、花頭窓を備えた切妻の付属屋を両脇に持つ。本体大棟の両端部と付属屋の棟の端部に鯨を載せるなど、学校全体の正門に相応しい荘重な意匠である(図8)。

以上のように、大成殿、東階・西階、中庭、外門、19段の石階、校門が直線上に配置されることで、強力な軸性が生じている。その焦点となっているのが、大成殿内部聖龕の孔子像であった。そして、現在、この軸性は、石階の両脇に植樹された楷の木によって、さらに強化されているのである<sup>23</sup>。

この聖廟の軸は、軸を校門外に延長して行くと、泮池に架かる石橋に達する。つまり、大成殿内部聖龕の孔子像を焦点とする軸による場所の構造化は、聖廟から、広庭、校門を経て、泮池の石橋を越えて延長されるものであり、最終的には、閑谷川に沿いながら校域南境の石門を経て、校域の外部へと及ぶものである。聖性の高い焦点から直線的に俗なる外部へと通じて行く、この軸性は、水平的には、講堂を中心とする囲いによって構造化された「学びの場」が遠心的に広がる、その先の不可視の彼方に、俗なる外部の方向性を示すものと解釈できる。

逆に見れば聖廟の軸は、俗なる外部からのアプローチを示している。これが、校門内外での段差、広庭での勾配、石階での高低



差、大成殿内外での段差を経て、焦点である大成殿内部聖龕の孔子像に至る。つまり、俗なる外部から、聖性の高い焦点に至る、聖廟の軸には、高低差によって物理的な垂直軸が示唆されていると同時に、俗から聖への象徴的な垂直軸が含意されているのである。そうすれば、この垂直軸を、大成殿内部聖龕の孔子像を超えて、物理的・象徴的な意味での天に繋がるものとして解釈することも可能であろう。こうして聖廟の軸は、垂直的には、講堂を中心として遠心的に広がる「学びの場」の最後の囲いである山々の彼方が、垂直方向へと開かれる天空に重なって行くのである。

このように、聖廟は、聖性の高まりを示す領域にあって、軸の焦点として働いていた。その軸は、水平的には俗なる外部からのアプローチとなり、垂直的には聖なる天を志向して、「学びの場」に俗から聖への方向性を与えるものであった。

### 3-3. 聖廟と講堂とを関係付ける広庭

聖廟と講堂とは、聖廟の軸の一端が水平方向において、他端が垂直方向において、講堂を中心とする遠心的な広がりにおける彼方と響き合うことで、関係付けられていた。ここでは、聖廟の軸の途上にある広庭において、いかに聖廟と講堂とが関係付けられているのかを探って行く。

まず、聖廟の領域と講堂の領域とにそれぞれまとまりを与えている、聖廟・校門を結ぶ軸と講堂・公門を結ぶ軸とのあいだには、平行関係がある(図8,9)。

しかし、講堂自体は、南北の平側、東西の妻側とも対称の形態を採っているから、ここには、聖廟の軸と並行する講堂平側の軸と同時に、これに直交する講堂妻側中央を貫く軸も存在している(図10)。講堂内室北側中央には、学則である「閑谷学校壁書」が掲げられており、これが内室正面を示すことは明らかであるが、釣屋から講堂に入るときに正対する内室東側中央にも、閑谷学校の諸機構を整備して繁栄に導いた五代藩主池田治政の書「克明德」の額が掲げられており、東側がいわば内室第二の正面を成していることが示唆されている。また小斎が講堂南西に付されることによって、南側の公門からは講堂平側の全貌が捉えられず、講堂内部からも南への視線が一部遮られるかたちとなっているのに対して、東側の広庭には講堂妻側の全貌が示され、講堂内部も東側に大きく開かれるかたちとなっている。講堂平側の軸よりも、広庭に延びて行く妻側の軸の方が、むしろ顕在化しているのである。

この講堂妻側中央に形成される軸は、聖廟の軸と広庭で直交する(図11)。広庭は、聖廟の軸によって、その周囲に形成される領域にありながら、聖廟の外門という名称に示唆されているように、聖廟自体には属していない。当然、芳烈祠自体にも属していないし、芳烈祠の領域への帰属性も、芳烈祠の軸が広庭方向に受



図8 校門から聖廟へ



図9 公門から講堂へ

けを持っていないことから、聖廟の領域への帰属性よりも弱いと言える。また、広庭は、講堂妻側の軸によって貫かれ、講堂とのあいだにも直接的な関係を持ちながら、この軸の受けを持たないため、これに支配されることもない。

広庭は、東南を石堀によって、西を講堂の領域と講堂附属施設の領域とを分節する仕切堀によって、北を山裾に形成された土手と排水溝によって限られ、独自の空いたまとまりを持ちながら、聖廟の領域に属しつつ、聖廟外にあり、講堂と直接関係付けられながら、講堂に支配されないような、両義的な場所となっている。この広庭は、聖廟の軸と講堂妻側の軸とが直交する、その交点にあり、講堂を实の中心と見るならば、空くことで、「学びの場」の焦点である聖廟と中心である講堂とを関係付ける、虚の中心を成していると解釈することも可能であろう。

この虚の中心として空いた広庭から、聖廟の軸性と講堂の中

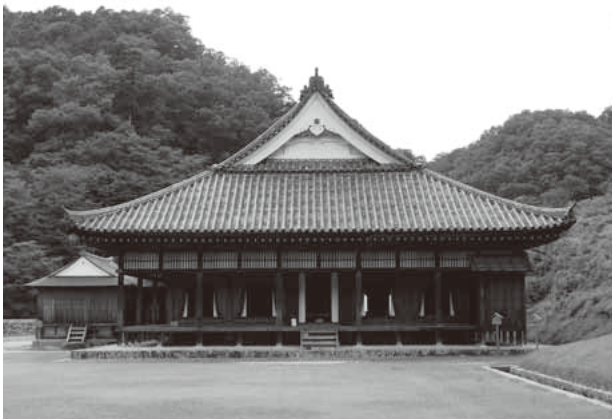


図10 講堂妻側



図11 広庭全景

心性とを捉え直してみると、虚の中心としての広庭は、実の中心としての講堂を包摂しながら、聖廟を焦点とし、俗から聖へ、天を志向する垂直軸を宿していると捉え得る。同じことを、聖廟の軸から見れば、水平的には俗なる外部からのアプローチであった軸が、聖なる天を志向する垂直軸へと移行する、その途上に、虚の中心としての広庭が空いて、講堂という実の中心を包摂し、「学びの場」の要となり、ここから「学びの場」を遠心的に開いていると言えるだろう(図12)。

以上、聖廟の軸の途上にある広庭において、「学びの場」の焦点である聖廟と中心である講堂とが、いかに関係付けられているのかを明らかにした。

### 3-4. 内在的外部としての小斎

講堂南西に接続する藩主御成間である小斎は(図10)、火除山の東側にある建築施設としては例外的に、備前焼本瓦葺では

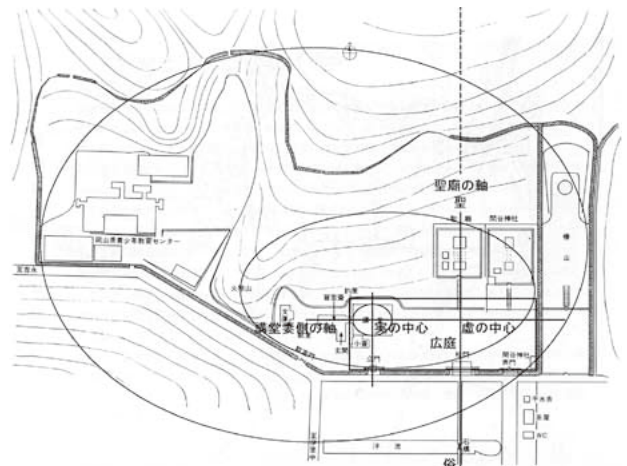


図12 閑谷学校「学びの場」の構造

なく柿葺であり、柱には面皮柱が用いられるなど、数奇屋風の異彩を放っている。藩主臨学の施設は、相当面積の立派なものを講堂近くに構えるのが常であるが、岡山藩の場合、藩学校・閑谷学校、何れにおいても、藩主臨学の施設を控え目なものとしている<sup>24</sup>。

小斎の入母屋の母屋には、四畳半台目の一の間と四畳半の二の間が東西に並び、東側の一の間が藩主の居間となっている。一の間は、南に畳床があり、北と東には講堂と広庭に面する廻縁を設けている。一の間北側の明障子を開くと講堂内部を、東側の明障子を開くと広庭越しに、聖廟から芳烈祠、さらには、それらと石塀を越えて閑谷の山々を一望できる。儒学による修養という建学の趣旨を質素な仮屋において体现し、それを見せることも教化の一環であると意識されていたとしても、ここには、「見せ、見られる」ことによる教化機能だけではなく、「見る」という機能も明確に表れている。

小斎は、教師と諸生という純粋な学問的繋がりからは外れる藩主の場として、「学びの場」の内部に仮構されたものであり、藩主が外部の視点をもって、聖廟と講堂、それらに関係付ける「学びの場」の要である広庭、そこから開かれる「学びの場」を、全体として眺める、「学びの場」における内在的な外部として働いているのである。

## 第4章 「学びの場」の構造化のあり方とその特性

ここで、閑谷学校における「学びの場」の構造化のあり方を、手短かにまとめておく。

閑谷学校の校地は石塀で限定され、その内部を、火除山と諸門などによって、6つの領域に分節されている。これらの領域は、東西に並列し、聖廟の領域に聖性の高まりを置きながら、それに



隣接する講堂の領域、つまり、非日常には儀礼施設であり、日常には学習施設でもある、両義的な講堂の領域で、東側の非日常の儀礼に特化した諸領域と西側の日常の学習・生活に特化した領域とを媒介するように配された。このように、聖廟と講堂とは、6つの領域を関係付ける中枢として働いている。その個々の働きとしては、まず、講堂が、「学びの場」を、内室から山々へと、内部へは閉ざし、外部へは開きながら、次々に囲い、分節して行く中心として働き、さらに、聖廟が、「学びの場」に俗から聖への方向性を与える軸の焦点として働いていた。こうして聖廟と講堂とは、聖廟の軸の一端が水平方向において俗なる外部からのアプローチを示し、他端が垂直方向において聖なる天を志向することで、講堂を中心とする遠心的な広がりにおける彼方と響き合い、相互に関係付けられて行く。また、聖廟の軸の途上にある広庭においても、聖廟と講堂とは関係付けられていた。聖廟の軸と講堂妻側の軸とが交差する広庭は、空くことで聖廟と講堂とを関係付ける、虚の中心を成すのである。虚の中心としての広庭は、実の中心としての講堂を包摂しながら、聖廟を焦点とし、俗から聖へ、天を志向する垂直軸を宿す。動的にこの事態を捉え直すと、水平的には俗なる外部からのアプローチであった軸が、聖なる天を志向する垂直軸へと移行する、その途上に、虚の中心としての広庭が空いて、講堂という実の中心を包摂し、「学びの場」の要となり、ここから「学びの場」を遠心的に開いている、ということである。そして、講堂南西に仮構された小斎は、こうして開かれる「学びの場」全体を眺め得る、「学びの場」における内在的な外部であった。

最後に、こうした閑谷学校の「学びの場」の構造化のあり方を、近世教育施設の代表である幕府の昌平坂学問所、閑谷学校と縁の深い岡山藩学校、聖廟・講堂の配置関係が閑谷学校と類似する萩藩新明倫館と、簡潔に比較しておく。

昌平坂学問所、その前身である忍岡林家塾では<sup>25</sup>、何れの時期においても、聖廟が、他の学習施設、生活施設から隔てられた上で、強い軸性を付与されており、聖廟の独立性が重視されている。岡山藩学校では<sup>26</sup>、独立性を保った講堂と、聖廟を兼ねる中室とが同じ軸上に前後して配され、この軸を対称に他の諸施設が置かれるという、極めて人工的な構成を採っている。萩藩新明倫館は<sup>27</sup>、藩教育の主流が徂徠学から朱子学に転じるのと時を同じくして、旧明倫館から場所を移して大幅に拡大されたものである。独立聖廟と広間型独立講堂とを持ち、しかも聖廟の軸と講堂妻側の軸とが直交しており、聖廟・講堂の配置関係が閑谷学校と類似している。しかし、閑谷学校の広庭に当たる部分は、聖廟の前庭と講堂の前庭とに仕切塀で分断されており、聖廟の軸と講堂妻側の軸とは、直交するものの、実質的な関係を持っていない。ここでは、聖廟の軸と講堂平側の軸との並行関係が支配的であっ

て、聖廟・講堂、それぞれの独立性が重視されているのである。

昌平坂学問所、岡山藩学校、萩藩新明倫館、閑谷学校とも、共通して、儒学、特に朱子学を教育の根幹に据える近世教育施設として、聖廟と講堂とを学校の中心施設とする。しかし、閑谷学校の場合、城下ではなく山間に設けられた郷校として、周囲の自然環境と一体化し、自然的要素と人工的要素とを複合的に利用しながら、その「学びの場」を構造化している点、聖廟と講堂とに独立性を与えるだけでなく、それらを重層的に関係付け、その関係付けの中心となる空いた広庭を「学びの場」の要として、そこから「学びの場」全体を開いている点に、顕著な独自性を認め得るのである。

## 結 形式から意味へ

聖廟・講堂といった主要施設をはじめとする建築要素・建築構成要素のあいだの配置関係に注目して、そこに中心・囲い・焦点、領域・軸といった場所を構造化する諸要素を読み取り、閑谷学校における「学びの場」の構造を分析することで、その形式的特性を明らかにしてきた。その結果は、前章に示したとおりである。

本稿の試みは、クリスチャン・ノルバルグ＝シュルツが『実存・空間・建築』で示した「実存的空間」の概念に導かれながら、「学びの場」の構造分析を行うというものであった<sup>28</sup>。こうした抽象化をとる分析が、往々にして建築細部の魅力を捨象してしまうことは意識しつつも、これまで殆んど論じられてこなかった複合的な藩営教育施設における建築的環境の成り立ちを全体として捉え、その魅力の源泉を探るには、有効な方法であると考えた。

閑谷学校の「学びの場」を構造化している要素のうち、聖廟を焦点とし、俗から聖へ、天を志向する垂直軸は、朱子学における内的修養と外的修養の方法論である「居敬・窮理」と、講堂を中心として遠心的に広がる囲いは、格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治国・平天下という「大学の八条目」と、それぞれ響き合うものであろう。閑谷学校が、儒学、特に朱子学を教育の根幹に据えていることから、建築的に構造化された「学びの場」に、こうした儒学的意味が孕まれているであろうことは、想像に難くない。稿を改め、形式から意味へと主題を移して、建築的に構造化された閑谷学校の「学びの場」が孕んでいる儒学的意味を探ることで、「建てること」と「学ぶこと」の連関を考えてみたい。

## 注

- 1) 郷校は、藩士子弟教育のための藩営の藩校と庶民子弟教育のための民営の寺子屋との中間的性格を持つ、庶民子弟教育のための藩営の教育施設である。閑谷学校は、こう

- した郷校として、最古のものである。藩校を含めた藩営の教育施設全体としても、閑谷学校に先立って設立されたものは、同じ岡山藩の藩学校の他に、名古屋藩明倫堂、会津藩日新館など僅かなものがあるだけである。
- 2) 石川謙『日本学校史の研究』日本図書センター、1977(初版：小学館、1960)。笹井助治『近世藩校の総合的研究』吉川弘文館、1960。
  - 3) 谷口澄夫『岡山藩政史の研究』塙書房、1964(復刻再版：山陽新聞社、1981)。水野恭一郎「郷学「閑谷学校」の設立とその機構について」『人文学論集』第4号、仏教大学学会、1970年9月、105-131頁。
  - 4) 特別史跡閑谷学校顕彰保存会(企画)『増訂 閑谷学校史』福武書店、1987(『閑谷学校史』1971の増訂版)。
  - 5) 工藤航平「藩校研究の視角」『近世藩制・藩校大事典』大石学(編)、吉川弘文堂、2006、55-62頁を参照。
  - 6) 『閑谷学校研究』第1号-第14号、特別史跡閑谷学校顕彰保存会、1997年5月-2010年5月。
  - 7) 城戸久『藩学建築』養徳社、1945。城戸久『閑谷学校』中央公論美術出版、1967。高橋宏之「近世教育施設の教場型式成立に関する考察(その1)」『1973年度大会(東北)学術講演梗概集』、日本建築学会、1973年10月、1529-1530頁。高橋宏之「近世教育施設の教場型式成立に関する考察(その2)」『1974年度大会(北陸)学術講演梗概集』、日本建築学会、1974年10月、1507-1508頁。高橋宏之「萩藩明倫館について1-古明倫館-(近世教育施設の研究9)」『東海支部研究報告集』第10号、日本建築学会東海支部、1972年4月、209-212頁。高橋宏之「萩藩明倫館について2-新明倫館-(近世教育施設の研究10)」『東海支部研究報告集』第10号、日本建築学会東海支部、1972年4月、213-216頁。城戸久・高橋宏之『藩校遺構』相模書房、1975。
  - 8) 『特別史跡並びに重要文化財閑谷学講堂外四棟保存修理(第一期)工事報告書』岡山県教育委員会、1961。『特別史跡並びに重要文化財閑谷学聖廟、閑谷神社々殿及び石堀保存修理(第二期)工事報告書』岡山県教育委員会、1962。
  - 9) 箱崎和久『日本の美術 第538号 近世の学校建築』ぎょうせい、2011に、既往研究の状況が概観できる。
  - 10) 注6に示した『閑谷学校研究』には、第2号-第4号に中村義雄による「閑谷学校の史跡・文化財」と題する一連の報告が、第11号-第14号に竹内良雄による「閑谷学校の意匠」と題する一連の報告が掲載されている。
  - 11) 本稿での「学びの場」の構造分析の試みは、クリスチャン・ノルベルグ=シュルツ『実存・空間・建築』加藤邦男訳、鹿島出版会SD選書、1973(原書：1971)に示された「実存的空間」の概念に導かれてのものである。この概念が場所を論じる上で有効なものであることは、この概念が、クリスチャン・ノルベルグ=シュルツ『ゲニウス・ロキ 建築の現象学をめざして』加藤邦男・田崎祐生訳、住まいの図書館出版局、1994(原書英語版：1980)で場所論へと展開されたことから明らかであろう。場所論の潮流については、前川道郎「序論〈場所〉ということ」『建築的場所論の研究』前川道郎(編)、中央公論美術出版、1998、3-31頁を参照。建築論における場所論の位置に関しては、田路貴浩「学会展望 建築論」『建築史学』第41号、建築史学会、2003年9月、111-137頁を参照。
  - 12) 第1章は、注4に示した『増訂 閑谷学校史』の第一章と第二章とを主に参照した。
  - 13) 小斎は延宝5(1677)年に旧講堂が黒瓦葺に改築された時に建てられたとも言われ、事実とすれば、現存する閑谷学校の諸施設のなかで最も古いものということになる。神野力「閑谷学校の文化財」『特別史跡 閑谷学校』福武書店、1975、181頁を参照。
  - 14) 校門の建立に関しては、注7に示した『閑谷学校』『藩校遺構』では、貞享元(1684)年の新聖堂完成から元禄14(1701)年の石堀築造のあいだを想定しながら、校門の中国風意匠から推して、元禄14(1701)年としている。備前市歴史民族資料館(編)『平成15年度紀要 閑谷学校の建造物』備前市歴史民族資料館、2004年3月、21頁では、新聖廟完成から3年後の貞享3(1686)年を建立としている。なお、現在、史跡拝観の出入口として使用されている門は、明治8(1875)年に芳烈祠が閑谷神社に改称されて県社に列せられたときに設けられた冠木門を、昭和54(1979)年に備前焼本瓦葺で建替えたものである。
  - 15) 『備陽国学記録』の文化11(1814)年4月14日の条に載せられた、教授武元君立が記録した閑谷学校諸則の第8項にある記述。
  - 16) 注15に示した文化11(1814)年教授武元君立記録の閑谷学校諸則の他、武元君立から菅茶山に宛てた文化10(1813)年6月24日付けの書状などに、閑谷学校での教育の様子を具体的に窺うことができる。閑谷学校創学330年記念事業実行委員会閑谷学校資料館図録部会(編)『閑谷学校資料館図録』特別史跡閑谷学校顕彰保存会、2000年、46-47頁及び53頁にそれぞれ掲載。
  - 17) 「釈菜の儀」の一連の流れの中にある「神酒頂戴の儀」には、学習施設である講堂・習芸斎を使用した、「釈菜の



- 儀」終了後に行われる御祝儀頂戴には、こうした学習施設を用いることはなく、飲室や学房学舎の食堂が用いられた。中村義雄「閑谷学校の史跡・文化財 二 講堂 小斎・公門・習芸斎及び飲室・文庫(付火除山・学房跡)」『閑谷学校研究』第3号、特別史跡閑谷学校顕彰保存会、1999年5月、150頁を参照。
- 18) 泮池とは、中国古代の諸侯が設けた学校の東西門以南の半周をめぐる掘状の池のこと。天子の設けた学校には四周にこうした池がめぐっていたため、水が半分の池という意味で、泮池と呼ばれる。
- 19) 現在、小斎と玄関とのあいだにこうした仕切扉はないが、閑谷学校を描いた古図にはしばしば表れている。図2に示した、文化10(1813)年に武元君立が作成した「閑谷学図」にも描かれている。
- 20) 泮池の水は、東の御納所に沿って流れる谷川から導き、西の山裾を流れる閑谷川へ落とすようになっていた。
- 21) 儒学教育施設であるから孔子を祀る聖廟が重視されるのは当然として、講堂も各学派の教育方法に応じて重視される場合がある。個性尊重の立場から自主学習を重んじた徂徠学派では、広間型講堂を不要としたが、朱子一点に集中して講釈中心の教育を行った闇斎学派では、広間型講堂が不可欠であった。闇斎学派に通じる朱子学派でも、広間型講堂への要請は強かった。
- 22) 孔子の金銅椅座像は、元禄14(1701)年に、津田永忠が、京都の儒者中村惕斎に監修を依頼して、京都の名工に鑄造させたもので、宝永元(1704)年に鑄造された光政の金銅座像とともに、宝永4(1707)年に至って、大成殿と芳烈祠とに、それぞれ安置された。
- 23) 閑谷学校の楷の木は、白沢保美林学博士が、大正4(1915)年に中国曲阜の孔子の墓所から楷の実を持ち帰り、播種・育苗して、全国の儒学に縁のある施設等に分けられたもののうちの2本である。
- 24) 藩学校では、講堂の東側と西側とに各5棟並んだ学舎のうち、講堂近くの西側南端の松舎が、藩主臨学の施設に充てられていた。残る9棟の学舎と規模においても、造りにおいても同等のものである。
- 25) 忍岡林家塾・昌平坂学問所に関しては、主に次を参照した。『日本教育史資料 七』、387-466頁。中山久四郎(編)『日本教育史基本文献・史料叢書57 聖堂略志』大空社、1998。石川謙、前掲書、169-221頁。西山松之助(監)『湯島聖堂と江戸時代』斯文会、1990。城戸久・高橋宏之、前掲書、117-126頁。
- 26) 岡山藩学校に関しては、主に次を参照した。『企画展 池田家文庫絵図展 岡山藩の教育』岡山大学附属図書館、2009。閑谷学校創学330年記念事業実行委員会閑谷学校資料館図録部会(編)『閑谷学校資料館図録』特別史跡閑谷学校顕彰保存会、2000年、97-106頁。城戸久・高橋宏之、前掲書、185-192頁。
- 27) 萩藩明倫館に関しては、主に次を参照した。高橋宏之「萩藩明倫館について1 -古明倫館- (近世教育施設の研究9)」『東海支部研究報告集』第10号、日本建築学会東海支部、1972年4月、209-212頁。高橋宏之「萩藩明倫館について2 -新明倫館- (近世教育施設の研究10)」『東海支部研究報告集』第10号、日本建築学会東海支部、1972年4月、213-216頁。城戸久・高橋宏之、前掲書、227-239頁。石川謙、前掲書、514-535頁。『平成12年度岡山県立博物館特別展 特別史跡閑谷学校創学330年記念 図録 江戸時代の教育と閑谷学校』岡山県立博物館、2000。
- 28) 注11を参照。

#### 図版出典

- 1) 2009年8月6日筆者撮影。
- 2) 閑谷学校創学330年記念事業実行委員会閑谷学校資料館図録部会(編)『閑谷学校資料館図録』特別史跡閑谷学校顕彰保存会、2000、16頁。
- 3) 『日本教育史資料』附図に施設名称等を筆者加筆。
- 4) 特別史跡閑谷学校顕彰保存会(企画)『増訂 閑谷学校史』福武書店、1987、口絵の「閑谷学校配置図(現在)」に領域名称等を筆者加筆。
- 5) 『特別史跡並びに重要文化財閑谷学講堂外四棟保存修理(第一期)工事報告書』岡山県教育委員会、1961、4頁の「第1図 講堂平面」に室名称等を筆者加筆。
- 6) 2009年8月6日筆者撮影。
- 7) 『特別史跡並びに重要文化財閑谷学聖廟、閑谷神社々殿及び石堀保存修理(第二期)工事報告書』岡山県教育委員会、1962、図面第一図「聖廟配置図」に要素名称等を筆者加筆。
- 8) 2009年8月6日筆者撮影。
- 9) 2010年8月5日筆者撮影。
- 10) 2009年8月6日筆者撮影。
- 11) 2010年8月5日筆者撮影。
- 12) 特別史跡閑谷学校顕彰保存会(企画)、前掲書、口絵の「閑谷学校配置図(現在)」に分析図等を筆者加筆。